

佐川修著『春秋学論考』

著者	島森 哲男
雑誌名	集刊東洋学
巻	52
ページ	111-118
発行年	1984-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132354

書評

『春秋学論考』

島森哲男

佐川 修著

事である。

一

經学を修めることが中国の伝統文化を深く理解するためには必須である、經学をなおざりにして中国の思想だの哲學だのを軽々に論ずるものではない、と常々言われながら、なかなか敢て腰を据えて經学をやろうという者はいない。經学は荷が重い。なかでも『春秋』は『易』と並んで難解で、やり出したらきりが無いと言われている。朱子も「易と春秋とは看難し、学者の当に先にすべき所に非ず」（語類67）と戒めているほどである。

その『春秋』を修めて約半世紀、古稀をむかえられた著者が、これまで発表された論考を集成し一書に編まれ上梓された。『春秋学論考』（東方書店刊、一九八三年）。『春秋』とくに『公羊伝』に関する本格的な經学研究の書に乏しい今日、本書がこうして出版されたことは、まことに学界の慶

著者の師 諸橋轍次氏が若き日、上田万年氏を訪れた折に、「こんな会話がかわされたという。『きみはいったい何をやるのか』『經学を修めたいと思います』『ああそうか。それでは支那文学だね』『いいえ、經学であります』『それじゃ、支那哲學のほうかね』『いいえ、經学であります』（著作集『第一巻月報』宋学史研究の思い出）。このように、經学をいわゆる中国哲學と区別しようとする姿勢は、本書の著者にも受け継がれている。本書が津田左右吉氏や日原利国氏の研究と一線を劃する所以である。著者はいう。乱臣賊子の横行をおそれた孔子が『春秋』を制作し、その中に「義」をこめたとするのが『孟子』の説であり、經書としての『春秋』の意義は実にこの点にある。しかしそこにこめられた「義」は、容易に判明しがたい。後世その「義」の追究が試みられるが、いわゆる『春秋』三伝はまさにその代表的成果にはかならない。このように『春秋』の「義」を追究しこれを解釈する学問が『春秋学』なのである（あとがき）。したがって本書において著者がめざすのも、この『春秋』の「義」を追究しこれを解釈することにある。それが著者を『公羊伝』へ向かわせ、董仲舒へとおもむかせるのである。本書の読者は必ずや、このような經学研究に注が

れた著者の情熱と深い学殖、そしてその底にうかがえる中国に対する敬愛の情に、心うたれるにちがいない。

顧みてわたしたちが日頃『春秋』三伝に接する姿勢というものを考えてみるに、春秋の義の追究という課題はひとまず棚上げにするか、あるいは無視するのが大体の傾向である。そうしておいて、一方でテキストを細かに分析・分断して、その成立事情を追究したり、また一方では中国哲学・思想史研究に役立ちそうな素材を恣意的に抽出して再構成を試みたりするというやり方が多い。今世紀に入ってから疑古・辨疑の学風が、科学的学問研究の方法としていよいよ精密化し普遍化するに伴い、経書を経書として統一的に読み深めていこうとする姿勢は次第に片隅に追いやりられることになった。かくして経学は告朔の餼羊と化し、経学ぬきの中国哲学のみが盛行することになる。しかしそういう趨勢の中にいるわたしたちにしても、例えばテキストの必要な部分だけを取り出して強調したり、あるいはこれは後次的な部分だからといって排除して顧みなかったり、また安易に文字を改めて二千年来の謎を解いたと称しているのを見ると、何か肝心なことを見逃しているのではないかと不安になる。そういう読み方があってもいいが、経書にはまた経書としての読み方があるのではないかと思えてくる。

そうして本書を読むと、経書というものはやはりこのように読むべきものなのだと、しみじみ思えてくるのである。

二

本書の構成は次のようになっている。

I 『春秋』の源流とその展開

第一章 『春秋』源流考

第二章 春秋・春秋義・春秋義例

II 『公羊伝』とその春秋学

第一章 『春秋公羊伝』源流考

第二章 『公羊』、『穀梁』二伝先後考

第三章 三世異辞説考

第四章 『公羊伝』の春秋学

III 董仲舒の春秋学

第一章 董仲舒の改制説

第二章 董仲舒の王道説

第三章 董仲舒の陰陽説

第四章 武帝の五経博士と董仲舒の天人三策

付録 一 清朝の春秋学——清末公羊学——

(以下略)

I の二章は本書全体の基礎論にあたり、著者の『春秋』

研究の基本的姿勢および方法が示される。まず『春秋』に言及する『孟子』の三つの章の緻密な疏釈を通じて、『春秋』は孔子が魯の史書『魯之春秋』に修正を加え、そこに独自の「義」を立てた書物であることが確認され、あわせて孔子の『春秋』制作が歴史的事実であることが論証される。ついで孔子が『魯之春秋』にもとづき、これに加損修正を加え『春秋』を制作する状況が、三伝に散見する零細な資料から追跡される。その結果明らかになることは、孔子の加損修正がそれほど大規模なものではなく、各国の史書が自ら持つ価値性を孔子が明確な自覚の上に立って積極的に推進し、それを春秋の「義」として立てたところに特質があること、春秋の「義」とは「正名」であること、正名の義が立ちさえすれば敢て加損せず、原文をそのまま踏襲したり、誤った記録を承知の上で継承したりした部分もあること、などである。次に孔子の制作した『春秋』の原型が、三伝に付して伝えられた経文の異同を仔細に比較検討することによって求められ、『左氏伝』に付して伝えられた経がその正統であり、『公』、『穀』二伝の経はそれを祖本としながら、種々の異同を生じた、より不完全な経であることが明らかにされる。ついで『春秋』経の原型を復元するためには、(一)孔子の『春秋』が『魯之春秋』の不完全な

記事を踏襲することによって生じた不完全性と、(二)その後の伝述の間に起った誤りによって生じた不完全性、および(三)三伝成立後に起った誤りによって生じた不完全性とを弁別する必要があることが、多くの具体的な挙例を通じて示される。第一章と表裏をなす第二章においては、『孟子』の三章をめぐる渡辺卓氏・馮友蘭氏らの異説の批判を通じて、著者の『春秋』理解が確認され、孔子の「義」を求めて、三伝が成立し、義例説が発生するいきさつが歴史的に概観される。

以上二章に既に明らかのように、本書は『春秋』の「義」の究明をめざして出発しているのであるが、それが『孟子』の文辞の緻密な疏釈や、三伝に散見する零細な資料の仔細・周到な検討を通じてうかがえるような、細心にかつ堅固なる文献学的方法に支えられていることが、本書の大きな特徴をなしている。

さてIで本書に方向づけを与えた筆者は、いよいよ『春秋』の「義」を説くこと最も詳しい『公羊伝』と、それに依拠しつつ、漢初政治改革の場にその学説を展開する董仲舒とにたち向かってゆく。いうまでもなく、このIIとIIIが本書の核心的部分をなす。

まずIIは『公羊伝』。第一章は、Iで『春秋』の源流が求

められたのと同じように、『公羊伝』の源流が孔門の春秋学にまで遡って求められる。まず孔門の春秋学の特質が、事実を述べるのではなく、理義を説くことに重点をおいていたことが示され、ついでその春秋学の正統を承けた孟子が、『春秋』を厳正な理義の書と考えていたこと、孟子の『春秋』観が、『公羊伝』のそれと本質的に同じであり、かつ思想上の類似点も多いことから、『公羊伝』の源流として孟子が重要な地位を占めていることが論証される。さらに孟子・齊学・『公羊伝』のつながりにも触れ、陰陽・五徳・文質などを説く鄒衍が注目される。次にこの齊学的要素を帯びた公羊の経説が、経師の口伝時代を経て、漢の景帝の時代に成書となるまでの経過があとづけられ、公羊氏以外の経師の口説も流入したであろうこと、また逆に『伝』に盛られない口説も成書以後なおあったことに注意がうながされる。

第二章では続いて『公羊伝』の成立時期が『穀梁伝』との先後関係に着目して追究される。『左伝』が史実の記述に詳しいのに対して、『公』『穀』二伝は理義の解説を主とし、書法も類似する。そこで古来多くの学者によってその先後主従優劣が論ぜられて来たが、その中でも注目に価するものが陳澧の公羊伝先成説と劉師培の穀梁伝先成説である。筆者は「直接二伝の伝文を比較検討して結論を導くの外はな

い」として、例により原典に拠って詳細な検討を加え、陳澧の公羊伝先成説が正しいことを証明し、あわせて独自の立場から、『穀梁伝』の「伝曰」「或曰」の内容を検討し、また『穀梁伝』の伝文で『公羊伝』によって意味の明らかになるものを示して、公羊伝先成の傍証とする。ついで劉師培の穀梁伝先成説を駁正し、劉説に従い得ない所以を説明する。

以上二章の検討過程においても問題になるように、口伝から成書への時期の判定は困難を極め、筆者の結論は妥当であると考えられるものの、なお相対的不確定要素を含むといわざるを得ない。こうなるともはや春秋学内部での逐条的比較検討のみをもってしては明らかにし得ない部分が残ることになる。そこでどうしても必要になってくるのが、戦国末から秦漢へかけての政治・思想界のうごきの全般的な見わたしと詳細な分析、そしてその中で公羊学派の、恐らくまだ固まらない要素をもつであろう生のすがたの追跡である。これはわたしたちに残された課題である。

さて肝心の春秋の義であるが、これを最もきびしく追究したのが『公羊伝』であることは先述の通りである。ところがこの春秋の義は経文に明示されているわけではないので書法を手がかりとして理解する他なく、ここに義例の問題が生ずる。その代表として『公羊伝』や何休が説くところ

の三世異辭説がある。第三章ではこの三世異辭説をとりあげて、それが経伝に照らして妥当するものであるかどうか、またこうした説が唱えられた意義はどこにあるかを検討する。ここでも筆者はまず何休その他の三世異辭説を一応括弧に入れて、経および伝そのものに就いて詳細に検討を加え、何休の異辭説が経からも伝からも帰納不可能であること、『公羊伝』そのものの異辭説も経に照らして多くの矛盾を含むことを明らかにする。ついで（ここが筆者の姿勢をよく示すところであるが）、かかる矛盾を含みつつも三世異辭その他の義例説が唱えられるのは何故か、という問いを発し、それが公羊学派独自の『春秋』観に由来すること指摘する。公羊学派は『春秋』をきびしく理義の書として見、歴史的には二百四十二年に限られているが、それ自体として完備しており、その大義は書法に寓せられているとみるから、完全なる義例を求めようとする。しかし義は経に明文として示されていない以上、経伝解釈の矛盾は当然起らねばならなかった。さらに『春秋』を完備した理義の書とみる立場に立てば、董仲舒のごとく、現実を自己の理想によって改善しようとする時にも、その理論的根拠を経伝に求めるといふことになるわけで、経伝解釈の矛盾はいよいよきわだったものになる、というのが著者の説明で

ある。なお最後にかかる矛盾は以上のような公羊学派独自の『春秋』解釈に由来するものばかりとはいえず、『公羊伝』成書以前から伝わる口説で、成書となった『公羊伝』には漏れた多くの経説に由来する可能性もあると示唆されている。

ところでこのように書法に即して理義を求めようとする義例説が矛盾をきたすとするれば、春秋の義はもはや明らかにし得ないのであるうか。否、筆者はいう。むしろ書法に法則が立つかどうかを問題にするよりは、すなおに伝のいうところに従い、伝文を全体として眺めて春秋の義とは何かを問うのが現実的である、と。かくして第四章において、筆者は広く具体例を提示しながら、『公羊伝』の重視する春秋の理義は、(一)統一尊王義、(二)非戦養民義、(三)正名人倫義の三義にあるとし、それぞれの意義を説明する。ここにはじめから求められて来た春秋の義が、筆者の再構成を通じて明示されるわけである。心意の重視や復讐の肯定といった『公羊伝』独特の思想もこの中にきちんと位置づけられている。

さて以上において検討されたような公羊学説に依拠して、一統天下の政治哲学を構築し、統一国家の革命原理とその具体的改制を説き、漢武帝の中央集権体制の理論的支柱を

準備するのが董仲舒であるが、Ⅲではこの公羊学派最大の思想家董仲舒の春秋学に焦点が合せられる。第一章は改制説。王者受命改制についてはすでに漢初から関心が払われていたが、五徳終始説に依拠するそれまでの論議に対して、董仲舒は三統改制・四法改制を軸に、文質改制・三教改制をあわせ説き、しかもそれがすでに「春秋」に示されていることを強調し、これを權威づけようとした。董仲舒がそのように改制を唱える目的は、周に繼いで一王の法を立てた「春秋」の改制を明らかにするにあり、その究極の目標は「春秋」を規範とすべき漢の改制の実体がいかにあるべきかを説こうとするにあった。その改制説の有する重要な意味は、それまでの改制論が単に機械的に考えられ、そこになんら道徳的配慮がなかったのに対して、漢の礼樂の改制を道徳との関連においてなすべきだと主張した点にあり、ここに純儒董仲舒の真面目をみる。

第二章は王道説。董仲舒はその王道説の根拠を「春秋」の「元年春王正月」に求め、元—春—王—正の四字の配列に意味を認めた。すなわち根本そのものである王者自身が天道に則って自己の為すところを正すことから始めなければならない、とするのである。このような主張は、「春秋」が漢王朝のためにあらかじめ法を制した不動の典籍である

とする「公羊伝」の春秋観にもとづき、漢武帝の政治規範がすべてそこに示されているという経世治用的見地に立つものである。ところで王者が規範とすべき天を、董仲舒は陰陽であるとして、陰陽の理によって王道説を組織だてた。陰陽の作用によって植物が生育養長する、いわゆる歳功を民に対する愛撫慈育に比擬し、王者は陰陽に則り愛民の政を行うべきであるとする。そうして王道が正しく行われれば陰陽は調和するが、そうでなければ陰陽は繆戾して災異が起る、とするのがその概要である。その具体例を著者は「漢書」五行志や「春秋繁露」から詳しく引証する。そして董仲舒のもつ思想的意義は、それまでおおむね自然の理として説かれていた陰陽説を、儒家として最初にかつ詳細精巧に、その王道説の中に取り入れ、これを組織だてたことになった、と結論する。この結論は第一章の結論と呼応するものであり、いずれも董仲舒研究の画期をなす。

第三章は陰陽説。これは昭和一四年の執筆で、その内容はすでに第二章にとり込まれているが、その説明がより詳しく具体的であるため、文辞を現代風に直してここに収められた。

さて漢の武帝によって設置された五経博士と、董仲舒の天人三策とは、儒教が官学としての地位を確立するため、

重要な意味をもったというのが経学史上の通説であるが、これに対し、これらに関する記録が『史記』の記載の中に存在しないという事実を媒介として『漢書』を検証した結果、五経博士と天人三策は後来の仮託にもとづく理想的な伝承にすぎないとするのが福井重雅氏の説である。第四章ではこの福井説をとりあげ、これを『史記』『漢書』の綿密な読みを通じて反駁し、董仲舒の経学史上の功績を再確認する。また「問題の多い春秋繁露は一応考慮の外に置くとして」という福井氏の姿勢に批判を加え、『繁露』をはじめとする関係資料をより精細に検討して、結論を出さねばならぬとする。

思うに福井氏も敬遠することく、『春秋繁露』には問題が多い。木村英一・容肇祖両氏の『韓非』に於けるがごとき研究が、『春秋繁露』に於いてもあつて欲しいとは、誰もが思うところである。本書のⅠ・Ⅱで『春秋』および『公羊伝』の源流を求めた著者の詳細周到なる方法をもって、Ⅲのはじめで『春秋繁露』の文献学的検討がなされていたならばどんなに有難いことか。これ望蜀の嘆である。

なお付録の一として、『清朝の春秋学』と題し、清末公羊学が展望される。何休以後二千年、ほとんど絶学に近い状態であった公羊学派春秋学が、その経世治用の色彩をより

強く帯びて復活するのが清末公羊学であり、それを集大成するのが康有為であるが、本章ではその先行として、なお経学的な前期の諸学者、莊存与・劉逢禄・宋翔鳳・龔自珍・魏源の思想がその著書に即してまず詳論され、ついで康有為の春秋学が紹介されて、徹底した経世治用の学としての春秋学の面目が明示される。

以下続いて『張論』と伝統思想」と題する論考と書評二本が収録されているが、紙数も尽きたので略させていただきます。

三

以上が本書の概要である。すでにこれまでの紹介で明らかのように、本書には大きく二つの特徴があるといえよう。まず第一に本書が本格的な、一貫した体系的視野に立つ経学の書であるということ。したがってここで追究されるのが春秋の義であり、それを公羊学派の人々がいかなるものとして理解し、また実践に結びつけていったか、そして著者自身はどう考えるのかが詳論される。凡そ公羊学について論ぜられるべきことはすべて論ぜられ、それが全体として一貫した体系的視野のもとに収められるさまはまさに壮観である。特徴の第二としてあぐべきことは、その文献学

的な方法の緻密かつ周到なことである。零細な資料を博搜し、時にはことばの微妙なニュアンスにまで目を注ぎつつ、最も妥当な結論を導き出してくる著者の方法は、わたしたちに学問研究の最も基本的な姿勢を教えてくれる。問題が錯綜すればするほど、原典に就いて虚心に読み深めていくことが必要だとする著者の態度は、本書の各所に見出すことができる。その意味で本書は、著者の研究を通じて明らかにされた幾多の成果によつてばかりでなく、本書を通じてわたしたちが教えられるところの厳密周到な学問の方法によつても、高く評価されねばならない。

と同時にわたしたちは、本書に盛られた成果をもとにして、著者とは別の立場から、その成果をより確かなものに、あるいは乗り越えていかねばならない。経学の立場のみをもつては結論の出せない問題に、どういう方法でどう迫るか、また著者に腹案はおありかと思うが、本書には盛り込まれていない、『春秋繁露』の文献学的な分析・整理の作業——これが今なおなされていないために、著者のこれだけ詳細な董仲舒研究があるにもかかわらず、その後、なかなか研究は進展を見せずにいる——をどう進めるか、それらは本書によつて与えられたわたしたちの宿題である。なおつけ加えるならば、本書はその完備した内容から、

また読み下し文を付し、索引を具えたその読み易さから、広く経学・春秋学の入門書としても、今後大いに利用されることが期待される。本書が春秋学・公羊学の基礎的知識を与えてくれるばかりでなく、経学とは何か、経書はいかに読むべきかを指南してくれるからである。

(東方書店 一九八三年一〇月刊 三四〇頁 八〇〇〇円)

〔付記〕

一、本書と章立てがやや異なるが、内容はほぼ同一の論文「春秋および公羊春秋学の研究」により、著者は昨年九月、九州大学より学位を得られた。

二、本書を紹介・批評したものに左記の二つがある。特に後者は理をつくして逐条的にきびしく批評しており、経学の立場の外からの批判として積極的である。併せ読みたい。

○町田三郎「春秋学論考」を讀んで (東方第37号)

○岩本憲司「書評：佐川修著『春秋学論考』」(中哲文学会報第9号)